

---

# 少年は褪せた価値を嘆き、魔女は嗤う

果樹円

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

少年は褪せた価値を嘆き、魔女は嗤う

### 【Nコード】

N2106Y

### 【作者名】

果樹円

### 【あらすじ】

天界・魔界・現世の三つの世界と、少年の中に眠る魔女と、悲劇の少年が織り成す厨二全開自己満ストーリーです。

## ファーストブレイク

無意識の内に踏み込んでいた世界は、ちっぽけな俺の世界をとつくに覆っていて。

歪で色褪せた世界の住人はひしめき合い、狂喜の声を上げて嗤うんだ。

初めて見る人が死ぬ光景。  
それも血に飢えた化け物による残酷なそれは、ただ快樂に浸るための遊戯にも思えた。

「どうだ、小僧。人の命が無残に弄ばれる世界は」  
「……………」

少年は答えない。無機質な瞳を伏せ、部屋の一角の木椅子の上で膝を抱え込んだ。

二年あまりの歳月を過ごした学園は殺し場と化していた。

空想上の世界の魑魅魍魎たちが学園全土に跋扈し、人の血を浴びて、狂喜を叫ぶ。

「人は皆、恐怖に打ち震え、絶望に立ち竦む。そして、夢であればいいと目を反らす」

流暢な人の言葉を話す彼もまた、化け物のひとりだった。

足元から首元にかけては人の体をしているが、顔は何かの類の鳥のようだ。一見、仮装のようにも見える。

「人は死を目前にして正常ではいられなくなるのだ。はたまた、その本性が見られる」

しかし、彼を化け物と裏付けるには容易いことだった。

「担任と言ったか。人の教養を担う者にしてはあまりに滑稽だったな。まさか、何よりも先に教え子の命を差し出すとは」

あまりに人と違いすぎるのだ。姿は仮装だとしても、力が。力が違いすぎる。

それは一方的な殺人だった。卓越した力を行使する化け物と人はまるで、像と蟻のようなものだった。

「それにしても」

鳥の顔が愉快そうに見やる。3年6組　少年のクラスメイトを化け物が屠る光景を。

勉強に興じ、友と語らった教室はもはや面影をなくしていた。机や椅子などの備品は破壊され、やや黒ずんでいた床は今や血の1色で染まっている。

その血の海の中に、クラスメイトの姿が見え、それは人と呼べる姿なのかも少年には分からない。

「気が付いていたか？」

そして、鳥の顔は、この教室の中で唯一人の姿を保ち、化け物の襲撃から度外視されていた少年を見やった。

鳥の金色の双眸に少年が映る。

黒い髪に、白い顔。大柄だが、華奢な体を縮こめた姿。

惨劇から目を反らした 不吉な紫水晶の瞳。

「お前はこの惨劇を前に恐れしていない。それどころか、死を間近に感じていない」

それは、まるで。

「お前が、お前自身が、この怪物を倒せるだけの力があるということをとを」

知っているからだ。

「ああ、面倒くさい」

刹那、少年の紫水晶の瞳が見開き、億劫そうに木椅子から立ち上がった。

だらしなく伸びた黒いカーディガンの袖をまくり、その拍子に両腕に何本もつけたミサンガが揺れる。

「……俺はてめえの正体も知らないし、この化け物らがなんなのかも知らねえ。けど」

「けど？」

「さつきから俺の中で誰かが叫ぶんだ。さつさとてめえらを殺せてな！」

少年は飛び上がり、化け物の群れへと突っ走る。

ちようど教室の人という人を殺し、まだ殺し足りないと切望していた獰猛な化け物たちの群れへと。

「どうだい、人の肉は？ さぞかし極上だったろ？」

少年は不敵に笑み、そこらに転がっていた金属バットを握る。野球部のものだろう。全身に力が迸り、それでもなお、力が有り余る。有り余った力が外へ外へと逃げたがっている。

ギギギ……！

雄叫びを上げながら、鶏のような化け物が先陣を切って、少年に鉤づめで襲いかかった。

しかし、少年の細い四肢を捕える前に、紫光を纏った金属バットが鶏の頭部を打ちつける。

鮮血が飛び散り、脳味噌が少年の頬を汚す。

少年は気にする仕草も見せない。鶏の化け物がのたうち回るのを横目で流しながら、次には度でかい蜘蛛に標的を定めた。

「見事な成果だ。さすがは、リズ嬢といったところだな」

「はあ？ 俺は蓮次郎だ。そんな女々しい名前なんてしてねえよ」

少年　村崎蓮次郎は折れ曲がった金属バットを投げ捨てながら、鳥の化け物を見やった。

残すは傍観していたこの鳥の化け物だけとなった。

もちろん、何十といた化け物を殺し尽くした蓮次郎の肉体はタダでは済んでいない。

腕や足の肉を深く切り、至る所から血を垂れ流している。バットを握っていた左手の指が蛇のように曲がっている。

それも不思議と痛みはなかった。蓮次郎の肉体を、頭中を占めるのは、なおも余りに余った力と、殺せと叫ぶ声だけだった。

「なるほど、私も殺そうというのか。だが、満身創痍のその体で私を殺せるのか？」

「ほざけ。今に焼き鳥にしてやるよ」

「……なるほど、いい感じに目覚めてきたわけだな。少しは私に感謝の意を示した方がいい」

鳥の嘴がくく、と嗤う。

「てめえ、さつきから何言ってるんだ。俺の体に何をした」

「何を？ さあな。それをしたのは私ではないし、お前自身だろう。その力も、瞳も、またお前自身の象徴」

鳥は金色の瞳を細め、続ける。

「つまるところ、それがお前の価値だ」

「わけわかんねえこと言ってるじゃ」

不意に、刃が駆ける。

それは蓮次郎が言葉を紡ぎ終える前に、鳥の化け物が反応する前に、何よりも速く、白き一筋の光が閃いた。

「ねえ、よ？」

蓮次郎が言葉を紡ぎ終えた瞬間、化け物の上半体が下半身と切り離れ、血潮を上げながら床に倒れた。

啞然としながらも、蓮次郎はその刃の主の方へと視線をやる。

「魔族と暢気に世間話なんて、随分と悠長なのね」

女だった。それも17歳の蓮次郎と一寸も変わらぬ、少女の  
ものだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2106y/>

---

少年は褪せた価値を嘆き、魔女は嗤う

2011年11月13日19時30分発行